

「あなたならしつわってしまっても」をめざして

〜第4回高齢者介護事例研究発表会からの報告〜

高齢者介護施設きらめきでは、全13拠点で実践している取り組みを職員同士が共有し、グループ全体のサービスの質の向上と、根拠あるより良い介護実践につなげることを目的に、毎年事例研究発表会を開催しています。



バックナンバー

きらめき通信 ミニ講座

検索

2019年度の

総研究数は41事例。昨年度同様、研究テーマを生協福祉のケア指針である「10の基本ケア」とし、ポスターセッション形式で発表を行いました。

職員アンケートにより一番印象に残った事業所には、小浜きらめき訪問・通所介護が取り組んだ『変化し続ける利用者様と私たち』K様の体調の変化、心情の変化に応じて、本人の思いに寄り添うことができるか』が選ばれました。

訪問・通所介護が取り組んだ『変化し続ける利用者様と私たち』K様の体調の変化、心情の変化に応じて、本人の思いに寄り添うことができるか』が選ばれました。訪問や通所職員が利用者に関わる中で、言動や気づき、家族の思いについて記録をとり、その内容を分類した上で統一した関わりに向けたケア会議を重ね、実践した研究です。事例研究の対象者の言動に捉われるのではなく、その真意を汲み取り、明確な根拠に基づいたケアを行っている



くことの大切さが明らかになりました。

次点には、岡保きらめきグループホームの『動かんとくと、なまってるまうぎ』が選ばれました。認知症の発症により家族とも疎遠になる中でグループホームに入居し、孤独や不安から暴言やトラブルが多くなった対象者。その言動を「心の変化グラフ」に記録し、背景や要因を探り支援したことを報告しました。

発表を聞いた職員からは、「チームケアを行う大事さを実感した」「やりたいこと

を実現していくことで、次第に感情的ではなくなっていくことが印象的だった」などの感想が聞かれました。

今年、オプサーバーとして参加いただいた福井県介護福祉士会 松ヶ平理事からはお言葉「介護は医療とは違う。介護には介護にしかできないことがある。」を考へて実行するために、これからも利用者の声に耳を傾け、思いに寄り添い、望む生活の実現に向けた支援に取り組んでいきます。

10の基本ケア(ケア指針)

- ①換気をする
新鮮な空気を取り込み衛生的な空間にすることで、病気にならない環境づくり
- ②床に足をつけて座る
足を使う習慣で、身体や脳を刺激しながら生活行為が自分でできる体づくり
- ③トイレに座る
トイレで排泄する“あたり前”の習慣で自尊心が高まるサポート
- ④あたたかい食事をする
親しい方との食事の楽しみを継続し、活力や栄養状態を高めた身体づくり
- ⑤家庭浴に入る
湯船にゆったりとつかり、温浴効果を取り込んだくつろげる生活づくり
- ⑥座って会話をする
落ち着いた雰囲気、不安や将来への希望を話し合える人間関係づくり
- ⑦町内にお出かけをする
外に出かける習慣で生活リズムを整え、地域の人々とのつながりづくり
- ⑧夢中になれることをする
自分の「したいこと」「したかったこと」に夢中になれる機会や居場所づくり
- ⑨ケア会議をする
くらし方やサポートの方向性をご本人、ご家族、関係者を行う対話の場づくり
- ⑩ターミナル(終末期)ケアをする
最期までご本人らしく過ごすための医療・福祉・介護による連携したサポートづくり

「VR(バーチャル・リアリティ)認知症体験会」を開催

11月22日(金) サンドーム福井 / 23日(土・祝) 県民せいきょう 本部センター・坂井地域交流センターいねす にて(参加者 138人)

昨年度も好評だったVR(バーチャル・リアリティ)を用いた認知症体験会を開催しました。参加された方には、実際には見えないものが見える「幻視」症状を特徴とした「レビー小体型認知症」の世界や、若年性認知症当事者である丹野智文さんへのインタビューをもとに作られた物語などを、ご本人の視点で体感していただきました。

「徘徊」「暴言・暴力」などは、「認知症」だから起こす行動と思われがちです。しかし実はご本人を取り巻く周囲の理解やコミュニケーションが大きく影響していることが多いのです。

そういった広く知られる「認知症」に対する誤解や偏見を少しでも減らし、「私たちに何ができるのか」を考える機会になったのではないかと思います。2020年度も開催を予定しております。

